

「安全を根底から積み上げよう－安全文化を築くものづくりへの挑戦－」

小松フォークリフト(株)

栃木工場製造部長（安全への挑戦プロジェクトリーダー）薄 猛氏
製造部ものづくり塾 塾長 宮田 佐俊氏

宮田佐俊氏：安全への挑戦プロジェクトでは、安全構想づくりに取り組み、安全教育の体系をつくりました。安全の生涯教育という考え方のもと、だれもが新人教育から始まって安全教育を生涯継続します。10年未満、10年以上20年未満においてはリフレッシュ教育があります。20年を過ぎますと、安全マイスターのテストを受けてもらって全員が安全マイスターになってもらおうと考えております。

昔はベテランの人が若い人たちを指導しました。ところがそういう先輩と後輩の関係や職場風土が薄れてきています。そこで、20年以上のベテランには職場の安全指導の役割を担ってもらおうと、なんとかかつての気風を復活させようという意味合いも込めまして、安全マイスターへの受験資格を、職位や管理者としての階層ではなく、経験年齢をもとに設定したのです。

質問：講師は危険感受性を高めることと一人ひとりが安全の原理を学ぶことの必要性の両方を強調しておられましたが、原理を学ぶと危険感受性がたかまるのでしょうか。

薄猛氏：

瞬間的にわかるには訓練が必要です。ぱっと見た時に、ここが危険だと反射的に気づくことは訓練しないとできません。ですが、なぜそういうことが必要なのかという基本的な理解をするには原理をつかむ必要があります。同時に、ある怪我が発生したり、一つの危険箇所を発見したりして、それを水平展開しようとするときに、原理がわかっているとしやすいのです。

たとえば「挟まれ」です。「ものともものが寄ってきて挟まれる」「スピードが速いほど怪我の度合いが大きい」「重量物であるほど怪我の度合いが大きい」。教育ではそういう基本的な原理を教えて、危険の発見、職場の点検をさせています。

しかし、ある危険な場面に出くわした時に、「あぶないな」と即座に察知するのは直感ですから訓練です。そのために先ほどご紹介したように「危険の動態保存」訓練を実施して、できるかぎり具体的な危険を実際に経験してもらうことを心がけています。

実は、原理を学ぼうといきなり言い始めたものではありません。私たちの工場は原理をまなぼうということを日ごろから徹底しようとして努力しているのです。

2004年から「6ゲンムダ取り」という改善活動を始めました。そこでは、私たち自身でつくりあげたオリジナルな思考方法である6ゲンネットワークをいう手法を活用しています。6ゲンとは、原点、原理、原則、現場、現実、現物のことですが、この6ゲンネットワークをうまく活用して改善を進めることが非常に効果をあげました。6ゲンネットワークの有効性を3年間の実務経験の中でつかむことができました。

この6ゲンネットワークが品質改善やコストダウンだけでなく、安全に適用できるだろうと考えました。そして安全パトロールと安全に関する改善活動を組み合わせて「6ゲン危険取り」という活動を創設し、今、新しい挑戦を始めたところです。